

說苑



歷代内務土木局長と其時代（十八）

唐澤俊樹氏

清 水 生

維新の大業と殉國の士



政治七百年の長い歴史を變革した明治維新の政變……大改革は世界の歴史に於ても偉大なる飛躍的な改造であつた、一年の歴史を通觀すると、王朝もと／＼我國は皇室を中心として發展すべき國柄であることは今更槩說するまでもない、理論上幕府の如きものは全時代……武家時代……皇政時代に古は國史上當然の歸結ではあるが、儲ていざ倒幕續いて明治新政府の創設等所謂我國が今日の如く世界に國威を輝かしに至るまでの基礎をつくるには中々容易の業ではなかつ出来るが、武家

たのである。さればこの一大改革を斷行し一大事業を完遂して我國永遠の光輝ある基礎を確立したのは、畢竟當時英俊人材が雲の如く輩出して彼等は總て一身一家を眼中に描かないで、只だ一つ身を以て何時たりとも勇躍喜んで國難に殉するの固き決意と尊き犠牲的精神を以てこの大事業に當つたから當時大なる國難を突破し、明治維新のあのやうな大事業が爲し遂げられたのである。

浦賀と蘆溝橋の一發砲聲

浦賀一發の砲聲は徳川太平三百年桃源の夢を破つたが、蘆溝橋一發の砲聲も亦或る意味に於て我國朝野に一大覺醒を促したと云つてよいと思はれる。明治維新以來我國は彼の日清、日露の兩聖戰を経て一躍世界列強と肩を揃へて何等遜色なき地位にまで躍進したのであつたが、然しその後國內諸般の情勢を冷靜に顧みれば頗る遺憾の點が多々あつたのである、例へば立憲政治が議會政治である以上、政黨も亦政治の運用機關として必然に存在するのは當然であるが、この政黨が自己の持つ使命を忘却して只だ徒らに政權

争奪にこれことどし、心ある國民の靈験を貰ひ、政治家は國家經綸の大策を忘れて自己の慾心を満たすに汲々とし、官吏は又緊張を缺いて只だ自己の榮達に浮身をやつして上官に追従することのみを以て能事とし、實業家は自由經濟の浪に乗つて國家といふやうなことは聊も考慮に入れずして、只だ單に自己の私利を計るに日も尚ほ足らざるの有様であつた時代も度々あつたることは否定出来ないものである。故に國家は如何なる難局に對所しても所謂今日流行語で云へばその指導者達が英傑であり、又人材であるなれば國民は何等の不安なくこれに追隨して時艱克服に邁進するものである、これが即ち我が國民の特有性であり又傳統性でもある、要は國難に際しては一層その感を深くするのである、彼の維新大業の三傑と云はるゝ西郷、木戸、大久保の人物を觀察すると。

維新の三傑と其の人物

南洲は一個の木強漢であるが、赤手單刀維新の風雲を捲き起して搏虎屠龍の手腕を弄したのもこの一木強漢であつ

た。この人は或る時は奥羽の野を驅馳して千軍萬馬を叱咤し、又正三位陸軍大將近衛の都督兼參議の顯職に登つて、天下に重きをなしたるも亦この一木強漢であつた、又高踏遠學富貴功名を知つて知らざる如く故郷の山野の間に吟嘯したのも亦この一木強漢であつた。この人は忽ちにして驚天動地の英雄となり、忽ちにして耕雲嘯月の野人となつてゐる、城山に骨を埋むまで幾多の變遷をしてゐるが、度量大にして一身は全く顧みず、富貴榮達を眼中になかつたためにあのやうな大事業が遂行出来たのである。大久保甲東に至つては度量は南洲の如く大ではなく、才略は木戸の如く敏ではないが、氣象沈毅、風骨巍然、一斷一決石を裂き鐵を截ち天下の責を一身に負うて避けないところに彼のゑらいところがある、善謀英斷、一箇の氣力を以て天下の政略を定め、一箇の手腕を出して天下の大事を辨じたるに至つては、絶代の政治家と云ふことが出来る。若し夫れ木戸松菊に至つては思慮周緻で細事と雖も滲漏せず、才機練達大事も糊塗せざるは彼の性格である、故に西郷の大勇遠略、

大久保の沈毅果斷、木戸の善謀深慮の三つが維新の三寶と云はるゝのも尤ものことと思はれる。

人材輩出と難局突破

維新的大業はかやうな大人物が現はれて、殊にその下に一命を投げ出して幾多の志士が粉骨碎身ことに當つたから成就したのであるが、現下の時局は實に皇國興廢の岐るゝ重大非常時に直面してゐる。即ち支那事變禍因の根本を剔抉し、敵諸國の一大包囲に對して皇國萬年の安泰を計らんためには既定の事變處理方策を堅持して全國家の總力を結集して鐵の如き團結を以て之が遂行に邁進せんことは絶対の堅要であることは云ふまでもない、即ち今日の時局はくどくとも説く迄もなく、眞に形容詞抜きの一億一心を要する秋である。爲政者の意思乃至企畫は直ちに國民の一人々々に透徹して令せしめて國策が急速圓滑に實現すると云ふ仕組みになつてゐなければならぬ。然るに從來やゝすれば政府は國民に非常な決意と總動員を求めながら、何も知らさずに只だ盲従せよと云ふやうな有様であつた、我國

民は四國の情勢、自分の立場、従つて國の現在がどんな地位にあるかと言ふことが明瞭に分つて來ると、想像も及ばない程の堅忍持久を平氣でやることは、これまで我が歴史の示すところである、故に國民に關する限り今後内外の情勢が如何に緊迫しようとも心配は要らぬと思ふのである。

只だこれを指導し協力を求むる當局……その人物がその態度方途に於て遺憾な點があると、折角のかゝる國民の美點も何の用をなさぬことになる、これを憂ふるのである、この點に於て東條内閣には多少人材がゐるか、臨時議會を召集して率直に時局の重大さを一層認識せしめたのは絶好の機會であつた、議會を通じての眞の舉國一致體制を確立し神速果敢に時艱突破の方途を講ずるのは誠に賢明の策と云へよう、要は如何の時代を通して觀察しても國家の人材があつたときは、その時代には如何なる難局に遭遇するとも、克くこれを乘切つて彼岸に達することが出来るのである。

唐澤氏の略歴

明治二十四年二月十日に……信濃の國は四面山もて圍まれて……と歌に唱ふ長野縣東筑摩郡小形村の村長であつた與十三氏の二男として生れてゐる、郷里松本中學校

惜て唐澤俊樹といふ人は如何なる人物か。……人もあらうに氏と前記した維新の英傑西郷南洲や木戸松菊、大久保甲東の大傑物と比較すると、讀者は本稿の筆者はどういふ馬鹿者であらうか、寧ろ馬鹿者どころか氣が狂つてゐるのではないかと疑ふことは勿論、笑ふて讀む氣がせんかも知らないが、然しこの人に遇ふて見ると、時代の相違は木戸、大久保、西郷をして英雄たらしめたが、勿論このやうな大人物の十分の一、二十分の一までは行かないかも知れぬが、西郷の持つ度量の大なることの一部は氏にもあり、又大久保の持つ決斷力も、亦木戸の持つ善謀深慮もこの人は多少に持つてゐると思はれたのである、兎も角現代に於ては人材の一人であることだけは間違ひはないと直感したのであつた、先づこの人の略歴を見ると。

唐澤氏の人物に付いて

から仙臺の第二高等學校を了へるまでは常に優等の成績であつたが、大正四年東京帝國大學政治科を出るときもやはり一番と云ふ最優良の成績で卒業してゐる俊才である、殊に高等文官試験の如きは氏が大學在學中の大正三年にこれ又見事な成績でパスしてゐる、さうして最初は内務屬として内務系統の官界に入り、次いで茨城縣理事官、内務省の圖書、町村、文書、行政、地理の各課長を歴任し、更に大臣官房會計課長兼内務大臣祕書官、警保局保安課長等を勤めて和歌山縣知事となつたが、昭和七年五月二十六日に嘗て朝鮮で名總督として唱はれ海軍大將である齋藤實氏に大命降下されて、この内閣が出來上ると氏は翌々の二十八日に前局長湯澤三千男氏のあとを襲

三月に倒れたが、越えて昭和十四年八月十三日に丁度陸軍大將である阿部信行氏に大命降下してその内閣が出来ると、氏は當時内閣の三長官の一つである法制局長官に抜擢せられて就任したが、翌十五年一月十六日に至つて阿部内閣が瓦解したので氏も亦この内閣と運命を共にして辭職したのである、阿部首相は氏を勅選に奏請してこの時氏は勅選貴族院議員となつたのである。現在は東亞研究所の常務理事として活躍してゐる。又大日本體育會の副會長として國民の體育向上に努力してゐる、これが唐澤俊樹といふ人の略歴とでもいふべきものである。

氏の常務理事である東亞研究所

全體東亞研究所と云ふところは何をするのであるか、一般國民にはまた克くこれを知らないものあると思はれるので筆者はその設立趣旨を見ると。

一國ノ國策ハ確タル科學的研究ニ基礎ヲ置クノ必要ハ贊言ヲ要セズ帝國ノ東亞ニ對スル使命達成ニハ先づ東亞ニ於ケル人文自然ノ科學的調査研究ニ發足セザルベカラ

由來東亞ノ地ハ各國ノ政治的勢力互ニ錯雜復綜シ加フ。ルニ氣候風土其ノ他自然ノ障碍大ナルノミナラズ幾多先住民族アリ其ノ傳統習慣及政治經濟事情等ヲ異ニスルヲ。以テ之ガ調査研究決シテ容易ノ業ニ非ズ爲ニ從來ノ調査研究動モスレバ肯綮ヲ失スルノミナラズ官民各方面ニ統一連絡ヲ缺キ又調査研究ノ結果ハ實際的利用ノ途ヲ失ヒ徒ニ匡底ニ死藏セラル、モノ勘カラズ。

茲ニ於テカ各般ノ調査研究ヲ深刻ナラシムルト共ニ廣ク官民ノ智能及調査研究機關ノ協力利用ヲ圖リテ綜合的調査研究所ヲ設立シタモノナリ。

とあるから、要するに東亞に於ける人文自然に關する綜合的調査及び研究を行ふところである。

同研究所と氏との關係

こういふ調査機關は國策遂行の基礎的資材提供の重要機關であることはいふ迄もなく、従つて歐米諸國では官民共に頗る發達して夫々大規模の機關を持つてゐるが、これま

で我國では一部識者の外は餘り關心は少なかつたやうであつたことは、筆者も亦遺憾とするところであつたが、昭和十三年九月一日に財團法人として有志の出捐と政府の補助金毎年二百萬圓を以て近衛公を總裁とし大藏公望男を副總裁として相當大規模の調査研究機關が生れたことは誠に結構ではある、只ぞ望むところは毎年二百萬圓といふ莫大な

金を國庫から補助せられてゐるからは、國家國民の期待に背かないやうに常に當局者は心がけて本研究所の使命達成に努力して貰らひたいとの一苦言を呈して置くのであるが、唐澤氏は近衛總裁の懇望に依つて常務理事として所員四百名を統率して本所の事業たる東亞の人文及自然に關する調査研究、他の機關及學識經驗ある者に對して調査研究を委託、並にこれが助成資料標本等の蒐集並に調査及研究に關する文獻の出版等に熱心努力してゐる、調査實施方法等を聞くと、勿論調査の緩急順序に依つては情粗はあるが、概ね滿洲、支那、極東露領、北太平洋、南洋、印度、濠洲、ニュージランド及其附近、西亞細亞地方となつてゐ

る、調査の方針に付いては我國との關聯に重點を置いて調査の結果は國策樹立の資料たることに留意して居るやうである、従つて徒らに研究室的な研究に墮し又は迂遠にしてその利用價値の乏しいものゝやうなものはこれを避けてゐる、尙ほ各地域毎に調査研究を行ふてゐると同時に、絶へず

有機的綜合的調査研究に着意するの方針を執つてゐる、而して是等の調査研究に當つては、本研究所の獨力を以て爲さないで在來の各種調査機關並に權威者と能く協力して、既存の調査研究資料は之を整備利用して貴重有益な調査研究に從事するものに對しては、本研究所の調査方針に基いて委託助成をして綜合的研究の實を擧げるのに勉めてゐるが、純然たる調査研究機關の立前を以て進み、従つて調査以外事業、例へば文化事業の實施等は全然着手實施せないことになつてゐることである。

唐澤氏と語る

そこで筆者は某日この東亞研究所に唐澤俊樹氏常務理事を訪ふて見た。氏と初対面ではあるがその受けた印象は、

この人は實に愉快にして何等城壁を設けず、全く初對面にして百年の知己のやうな感をした。即ち一言にしてはこの會見は實に愉快であつたのである。氏は筆者の訪問の趣旨に對して率直に語るところに依ると。

僕の土木局長就任は確か昭和七年六月の末頃であつたが、その時の内閣はあるの犬養内閣が五一五事件で倒れて後繼内閣に齋藤實大將を首班とする即ち齋藤内閣が出來て間もない時であつた、そして内務大臣は山本達雄氏であつたが、やめたのは昭和九年七月十日で丁度岡田内閣がその月の八日に出來たから二日後である、故に僕の土木局長在職は約一ヶ月と八月位であつたらう。と氏は土木局長就任當時のことについて語られたあとに次いで。

あの時分は財界不況の結果、農村の疲弊も相當甚だしかつた時であつたから、これ等を救濟するには直接效果ある土木救濟に依る外はないとの下に、土木事業費總額約二億餘萬圓を計上して大々的に土木事業に取りかゝつ

たのであつた、故に例へば河川改修工事の如きも、これまで年度々々に僅か一、二河川の着手に過ぎなかつたものが、僕の土木局長時代には一度に六河川の改修工事に着手したものじや。

と氏はこゝで當時の土木事業關係について種々話されてから。

失業救濟と農村振興策について

例へば、道路改良計畫問題にしても第二次計畫として

昭和九年度以降二十ヶ年間に特殊國道約七十里、國道約一千七百六十里、地方道路改良補助等に國費總額七億七千六百餘萬圓を計上した位であつて、更に京濱國道の交通緩和のために新京濱國道も新設計畫をなしたが、又甲府下諏訪間及び前橋新潟間の府縣道の國道編入並に改良等に關して追加したので、前の國費總額七億七千六百餘萬圓を八億三十餘萬圓に追加更正したのであつた、例へば僕の土木局長就任の翌年の昭和八年度の如きは、不景氣で失業が簇出してゐるのを救濟策と他方農村振興策のた

めに道路改良事業費は約六千百九十餘萬圓を計上してこれが實施に當つたやうに記憶してゐる。……道路改良事業費だけでもこのやうな計畫の基にどしどしへ施行して當時の所謂時局匡救に對所したのであつた。

と氏は當時、財界の不況延いてはこれが失業救濟對策と一緒に付いて話されたが、更に言葉を次いで。

土木會議の設置

僕の土木局長時代に彼の道路會議が廢止となつて、こ

れに代るに道路、河川、港灣等の土木關係事業を一切含んで審議する機關として土木會議なるものが生れたのであるが、この會議は現在でも存續して相當機能を發揮してゐるやうである、又僕の土木局長の時代に技術方面の人々等にも相當異動があつたが、その當時中川吉造博士は技監であつて、この人は却々立派な人で色々と人事の差配に付いて心配をなしてくれたし、又努力もして呉れて勅任級の人が五、六人も勇退したことがあつたが、中

用氏も自から進んで後進に途を拓くために昭和九年五月に技監の職を青山氏に譲つて勇退されたのであつた。と話は當時後進に途を拓くために、どうしても技術部關係の人事異動をやらねばならなかつた事情等に及んだあとで筆者は法制局長官時代はと云へば、氏は。

貿易省の設置問題

僕の法制局長官のときには、例の貿易省設置問題で多分騒いだものであつた、當時企畫院でも貿易省の設置は

なかつた。

貿易を益々發展せしむるためには必要であり、又商工會議所や重なる實業家の意見も我が國情としては金は必要である、即ち正貨準備が段々減ずるから是非共金を得ることに努力せねばならぬ、夫れには貿易を益々發展せしめて以て金を得ることに努力する必要がある、こゝに貿易省新設論が生じて、各新聞も亦これを提唱し云はば貿易省の設置は當時の輿論とでも云へる位であつたから、

法制局もこれが新設に關して種々研究もなし成案を得る

に勉めたのであつて、實を云ふと僕は當時財界や經濟界

氏の中學時代からの友人鈴木博士は語る

勅任技師として現在東京土木出張所長である工學博士鈴

木雅次氏は唐澤氏とは郷里を同じくし、しかも青年時代には松本中學の同窓生であるとのことを他から聞いた筆者は、鈴木博士を尋ねて唐澤氏の人となりを聞いて見るのも亦一興かと思ふて博士を訪ぶて見た、温厚な博士は既に筆者とは三四度面識があるので親しく筆者を引見して、

唐澤君のことか……僕も唐澤君とは郷里の松本中學校で同級であつて、従つて當時は共に暴れたものじや……：氏の性格か……實に頭脳は明晰であつて、又大膽なところがある。即ち規局宏大といへよう、嘗て氏が土木局長になつた時などは書類に捺印する印章を佐々木光綱君に預けて置いて任せてゐた位であるが、いざ大問題となると精蜜に研究をなし深く考慮を拂つて裁斷したものじや……：氏の頭は周到で科學的組織に富んでゐて、しかも機略縱横、雄渾豪膽なところがあるから、近代的政治家にはもつてこいの性格と頭腦を具備してゐると思ふてる。

と博士は唐澤氏の性格等に付いてかやうに話されたのに、

次いで郷里松本學校時代の同窓であつた人々のことに移つて。

唐澤君と中學時代に同窓であつた人々は、皆な今日社會上相當の位置にある人が多い。……例へば遞信次官であつた平澤君や、陸軍中將の丸山政雄君などもそうであるが、東京市の電氣局長の平山氏も第一銀行の重役で大坂支店長の上條氏、勞働運動で有名でもあり、又船員組合の會長であつて海のロマンスを書いて洛陽の紙價を高からしめたと云つてよい米達代議士も亦氏とは同級生で、共に松本中學校で学んだものじや……。

唐澤君は學生時代には英語も非常に克く出来たが、殊に數學は頗る上手の方であつた従つて企畫とか經營とか云ふやうな方面には一頭地を抜いてゐた。夫れで最初は工科の方に行く考へであつたらしいが、何かの都合で法科に行くことになつたやうだ。

と鈴木博士は語つて、尙も言葉を次いで、

高等學校時代は唐澤君は仙臺の第二高等學校に行き、

僕は第八高等學校に行つたから自然別れてゐたが、聞く

ところによると、君は高等學校でも常に優等の成績で通うして卒業の時の如きは一番で出たさうである、大學も亦一番に卒業したやうな全くの俊才である、そうして他人には仲々親切のところがある……。

博士と筆者との話しあはまできだが、唐澤氏の趣味はどうでしやうかと聞くと、博士は。

唐澤氏と趣味

唐澤君の趣味か……君は却々多趣味の人で例へば圍碁の如きは黒人はだしの位上手である、又書もなか／＼能く書家の墨を摩す位である、畫にも一觀識を有してゐて、

和洋畫伯に知己を以てゐるが、殊に俗のない深い云はゞ

滋味のある俳畫を一層掘下げて深くしたやうな南畫を好んで君自身も畫才があつて相當に達筆でかやうな風の南畫を能くするやうである。云々。

これが鈴木博士が筆者に對して語られた唐澤談とでも云ふ話しだある。

氏の土木局長就任と田中氏の唐澤觀

氏は湯澤氏のあとを襲うて土木局長になつた當時、氏と親交ある田中好氏はかやうに云つてゐる。

湯澤氏に去られた土木局は新に唐澤俊樹氏を迎へたが迎へたと言ふよりも本家へ戻つたと言つた方が可い程に内務省に縁の深い局長を得た。

と冒頭して氏の略歴を述べてから。

氏は頭腦敏慧であることや溫厚篤實の士であることは今更茲に書き立てる心要もない、唯だがつちりした局長を得たことは我が土木行政將來のために何となく心嬉しい。

と好良の局長を得たことを喜び。

唐澤氏は永年本省に在つて、本省向きの人であることは何人も異論はない、従つて氏が長野縣特有の理論的な緻密な頭を以て我が土木行政に如何なる理想を表はさるゝかは後日のこととしても、氏が和歌山縣知事時代に氏の先輩で、政友色彩の濃厚な役人じやと言はれた内務警

察兩部長をもつてゐても、常に縣治を理論的に執行して彼等をして手も足も出さず隙なからしめた、其の遺方から推すと我が土木行政が氏の手に依つて理論的に統制さるゝは必定であらうと思ふてゐる。

と土木行政の理論的統制の必要を述べて。

土木行政には利權が伴ふ

土木行政には常に利權が伴ふものが多い、従つて從來既成政黨が之に干渉して利權を漁つたやうなことが多々、世人は土木利權と解するやうであるが、これ等干渉を排撃して正常の行政を執行するのか土木局の重大な役目の一である、此度の内閣は是等の積弊を一掃するために生れた内閣である、従つて唐澤氏の手に依つて時々土木行政を見舞ふ魔手と聊ともすれば其の魔手に翻弄されむとする一部局員の心理を艾除し、土木行政として益々清淨のものにして貰ふには唐澤氏を指いて他に人がないであらう。氏の責任は誠に重大である。……土木局は土木行政の指導監督と土木工事を直接執行することが全

生命である、工事の直接執行は常に豫算を伴ふのであつてこれを編制することが大きな仕事であるが、永年會計課長の職にあつた唐澤氏の手に依つて編まれる譯であるから氏の來任は土木局としては福の神が降つて來た感があるであらう、併し其の豫算に依つて支辨されてゐる技術官以下の官吏更員は隨分多數に上つてゐて、之を統制することは仲々骨が折れる、世評に依ると是等技術官界の空氣は鐵道技術官等に較べると少しも激刺味がないと言はれてゐる、之を整理して技術官界を甦生して貰ふのもいやな事ではあるが、唐澤氏の責任であらう。

と土木行政と利權關係の矯正と當時土木局内の技術官界の空氣沈滯を甦生するのは氏の責任であると言つてゐるが、氏は就任以來約一ヶ年七月程在職中に尤も困難な技術官界刷新に力を致し、當時の技監中川博士と氣脈相通じて他より見れば手に汗を握らしめる如き大相撲をとつて遂に勤任技師以下多數を整理し以て後進者の途を拓き技術官界に潑

刺たる空氣を注入したことは氏と中川博士の功績と云つて

よいと言ふて可なりである。

氏の道路政策改訂論

唐澤氏は歷代土木局長の内では比較的永く土木行政の衝に當つてゐたから、從つて我國の土木行政に關しては、その造詣のあることは言ふまでもないが、氏の道路政策改訂論として書いてあるところを見ると。

大正八年原内閣時代に樹立された道路政策は我國道路行政の劃期的大事業であつた。

との書き出しの下に。

併し夫れは豫定されたことは大正九年度から同十一年度の三ヶ年に亘つて實行されたのに過ぎない。消極政策を探つた内閣では勿論であるが、積極政策を強調した内閣でも我國の道路事業に關しては餘り力を入れなかつた。と大正十二年度以降は僅かに年額三四百萬圓を以て國道以下の道路改良事業を助成する爲めに補助費を支出したのに過ぎない有様を述べて。

昭和六年度に於て幸か不幸か財界の不況に基因して多

數失業者が簇出したので、之を救濟するがため時の政府は失業救濟道路改良事業を計畫して政府自ら國道改良事業を執行し、地方をして府縣道を改良せしむるために補助政策を採つて總額一千三百五十萬圓を支出した。

と書いて更に氏の土木局長に就任した昭和七年度は名を失業救濟とは云はなかつたが、矢張り前年度の方針を踏襲して總額一千百八十四萬圓を以て道路改良に力めたことや更に農村の疲弊を救濟するために追加豫算に依つて國道直轄工事を増加し、府縣道以下町村道の改良事業を起工せしめて農民を就労せしむるために三千三百六十六萬圓を支出し更に同じく氏の土木局長時代たる昭和八年度に於ても、財界の窮乏其の他社會事情は依然として前年度と變りはないので、六千九十五萬圓を以て道路事業を執行したことや更に九年度に於ても氏は社會状況が變るところがないから相當額の豫算を成立せしめて産業の振興乃至は農村の救濟のために道路の改良を計畫したことを縷々述べたあとに。

原内閣の樹立した道路政策に依つて改良の第一歩を踏

道路改良と架橋状況

み出し、政府豫算は其の豫定を裏切つたが、政府の採つた道路改良方針は著しく地方を刺戟して自動車の増加に

伴ふて招來する道路の損壊を防止し、又は自動車の經濟的交通を圖るがために各地は競つて道路改良方針を樹立して着々工事に取掛つたのである、此政策に依つて完

成されたものは京濱間、阪神間、京阪間の各國道等の改

良を始め、王朝時代から天下の難路と言はれた箱根の嶮

は平けられ、交通難を以て人口に膾炙さるゝ鈴鹿の難路

も改修され徳川時代から旅人をして悩ました安倍、富士、

大井、天龍の大川や濱名湖に架橋され、東海道には随分

澤山の國道改良を觀るに至つた、其の外各地方に於て古

來交通上の難路と呼ばれたものであつて改良されたもの

が頗る多い、以上の改良業事…を見ると國道にあつては

九十一ヶ所の架橋に及び、其の工事費は約七千三百萬圓、

府縣道にあつては十一ヶ所で三百萬圓、六大都市の街路

に在つては約五千一百圓を要してゐる。

と道路改良の事業並にこれに伴ふ架橋状況を述べて、更に氏が執つた土木行政…道路政策の方針に及んで。

唐澤氏の道路政策

然るに政府の補助豫算は原内閣時代の計畫を實行する

に至らない、即ち工事の進捗と之に伴ふ政府の補助とは並行しない結果を見るに至つたので、以上の工事費に對

して地方が豫定した通り、補助するが爲には國道に在つては四千萬圓街路に在つては五百萬圓の支出を要するの

である、此の如く後世に補助を残すが如きことは避けた

いと考へて自分は新規事業に對し補助しない方針を採つてゐる。

と云つてゐるが、これは當時氏が土木局長時代に將來債務的補助の尻拭は重要な事項の一つであるとの、地方財政が

これがために相當其の經理に悩まさるゝを考慮して執つた方針と思はれるのであるが、氏の意見は道路政策の改訂論に入つて、

原内閣が道路政策を樹立した當時に於ても矢張三十年

後に於ける自動車の發達等を考慮し、之が交通上利用する道路改良を策したのであるが、併し當時に於ける自動車數は僅かに三千八百六十九臺であつて、夫れが豫想しえなかつた歐洲大戰の影響を受けて現在「昭和八年度」に於ては九萬七千臺を算するに至つたのであるから、是等自動車を利用する道路を改良するに付ても其の対策は自ら異ならざるを得ない。

と論じて。

即ち前計畫に於ては千八百里の國道を改良するにあつたのであるか、國道が我國に於ける幹線交通を支配するに鑑るときは先づ第一に之が全部的改良に力むるのが當然である。

とて、これまでの路面は砂利敷の原則は現在の自動車交通よりするときは、到底交通の需要を満足することが出來ないのを論じて、國道全線に亘つて近代的構造に依つて舗装するの必要あるを氏は當時主張してゐる、殊に自動車の増加に伴ひ道路と鐵道との平面交叉を避けることも亦道路交

通上又は經濟上必要事であるから、之も考慮する必要があると言ひ、結局原内閣時代の道路政策は新國道政策に一劃期的ではあつたが、事情が遠つて道路施設に對して新たに要求するものが増加したのであるから、道路築造の計畫方針も従つて改むる必要を説き、次いで。

國道に關する費用の負擔は原則として地方に歸せしめ政府は之に對して補助政策を採つてゐるが、自動車交通の經濟的領域が機械の巧妙と道路改良の促進と相俟つて漸次擴張され、行政區劃に拘泥せずして交通する事實に鑑み更に國內交通の幹線たる資質を持することを稽ふるときは、地方費の負擔制度に更に検討を要する問題あらう。

と國道に要する費用・補助政策の問題に論及したあとに。

國道の改良と相並んで必要なことは地方道路の改良である、從來の計畫に於ては軍事上其他特殊の事情に依つて國家的見地に基き其の新設政策を必要とする主要府縣道を改良する計畫であつた。

と軍事上必要道路や國家生活の必要と産業開発の見地に基く道路改良の點にまで論じて最後に。

幹線交通と國道の効用

從來決定された指定府縣道の制度は道路行政監督上の必要に出でたものであるが、監督を嚴重にする所以は道路の效用が、他の府縣道の夫れに比較して著大であることに基因するのであるから、是等の道路こそ幹線交通を司る國道の効用を増進するに最も必要なものであつて、それが改良を國家が助成するの理由と必要ある所以である、故に是等の道路六千里中既改良部分を除いた四千里は國道の改良と相俟つて政府に於て其の改良を助成すべく對策を講ずるの必要がある。……政府は曩に土木會議を設置して道路委員會に第二次道路計畫の改訂を諮詢したが、我が路政は一段の進歩を見るに至つて、道路を利する自動車の經濟的效用を遂げ國民生活に寄與するところ渺少ではないであらう。

以上は全部ではないが、唐澤氏が土木局長時代に書いた

道路政策改訂論の抜萃である、よつて氏が土木局長として當時抱くところの道路政策の一端を窺い知ることが出来るのである。

土木局長として氏の功績

兎も角唐澤氏の土木局長は、在職は比較的に稱や永い方でもあつたが、然し氏の土木行政に對する抱負と力量と手腕とは多くの功績を殘してゐる、今こゝでは夫れば一いち々書くことは貞にも限りがあるから省略するが、一、二例を擧げて見ると、氏は政府をして土木會議を新に設置せしめて時勢の進運に鑑みて道路政策の改訂を圖つて土木會議に諮詢の上、一定の成案を作つてゐる、即ち昭和九年度以降十ヶ年に亘つて未改修に屬する特殊國道約七十里を改良すると共に、國道中近代交通に適應せざるもの約千七百六十里を政府直轄の下に改良して、尙府縣に於ける指定府縣道の改良を助成し、更に地方に於て國庫補助を豫定して工事に着手しゐるものを國に於ては其の一部に對して既に補助した國道府縣道及街路の改良工事には補助することと

して總額七億七千六百餘萬圓の支出計畫を立てた所謂第二次道路改良計畫である。又治水方面を見ると、氏は在職中の昭和八年には多年の懸案である小貝、鳥、神流、最上上流、矢作、菊五ヶ川の起工に着手せしめ、又多摩、北上兩川を國に於て維持することとしたが、氏は既定計畫を豫定期間に遂行することは到底困難なるを豫見して土木會議にこれが善後策を諮詢して緊急改修を要する手取、米代、球磨、肝屬、豊、久慈、鶴見、相模、庄内、由良、吉井、鄉、菊池、白、大分の第一期河川未着手の十五ヶ川及び小矢部、天神、阿武隈下流、常願寺、黒部、北上上流、雄物上流、入間、新宮の九川は今後十ヶ年内に順次着工して同十五ヶ年内に完成し、其他の河川に至つては之れに續いて改修に着手するを適當と認め、更にこれ以外の河川に付ても今後の河川の變化に依つて水害の著しく増大したものにて速かに改修工事を施行する要ある場合は直ちに追加して工事に着手するものとなし、又國直轄の改修を待たないで府縣に於て改良工事をなす場合は中小河川改修の例に倣つ

て國庫から助成するの根本方針を定めたのであつたか、これが所謂第三次治水計畫である。其他氏は土木局長在職中には土木行政……土木事業方面にも技術部と早く連絡を保つて溝渠其他に付いても相當の功績を擧げてゐる。

非常事時局の一人材

大體この位にして置くことにするが、……通觀するに近頃の役人又は役人上りは極く少數の人々を除くの外、總體いくせに官僚全盛の波に乗つて獨善振りを發揮したり威張散らすものが多いが、二、三十年も前の官僚は天下國家を論じて眼中名利などはなかつたものである。唐澤氏は氏を評するに新官僚を以てする人もあるが、筆者は未だ寡聞にして新官僚とは如何なるものかは知らないし、又かやうな新官僚の團體の有無があるかどうかかも知らないが、然し眞にあの維新幾多の志士のやうに己れを空くして眞に國家を憂ゆる所謂憂國の士なれば新官僚と云はる人々も大に尊敬するに足ると思ふのである。……氏は勅選議員として籍を

立法院に置いてゐるが、未だ一般政治家として最も優秀な部類に屬するか否かは氏の政治的才幹がどれ程あるかに依て立證せらるゝところであるが、機局大にして細事に拘泥せず科學的な頭腦を以て常に事物を大所高所から達觀してゐるやうであるから敬服するに値する。爾來英雄偉人は山間から出ると言はるゝか、佐久間象山を出し、近くは福島大將や渡邊國重を出し、其他幾多の英才を出してゐる信濃の國から出た氏を偉人英雄とまで言はざるも亦現代の非常時局に際して國家が望む一人材であることは確である。

拙稿を書きつつあつた、十月十七日は太平洋情勢の緊迫化と日米關係の歴史的進展を前にして、第七十七臨時議會は準戰時體制を執つて緊張裡に開かれて、東條首相は我國策不動の基調たる「第三國が帝國の企圖する支那事變の完遂を妨害せざること、帝國を圍繞する諸國家が帝

國に對する直接軍事的脅威を行はざるは勿論經濟封鎖の如き敵性行爲を解除し經濟的正常關係を恢復すること、歐洲戰が擴大して禍亂の東亞に波及することを極力防止

すること」の三大項目貫徹を力説して政府國民渾然一體危局突破を期した日であつた。

かくて全國民の緊張と全世界の視線をこの殿堂に凝集して歴史的使命を果したこの議會は最後に東條首相の「國家の總力を集中して未曾有の國難を克服する」との確乎不拔の決意表示によつて幕を閉づるに至つた、……これに呼應してか否かイーデン英外相は二十日感謝祭の席上「日米會議は太平洋其他英國が直接且つ重要な利害關係を有する全地域に關するもので米國に對して百パーセントの支持を與へる云々」と日米牽制演説を行つてゐる、日米交渉は今尙ほ逆賊を許さざる状況にあり、果然太平洋に怒濤逆捲けば降魔の利劍は世界人類の平和と福祉のために彼等に反省を促すに至ることを銘記すべきである。「十月廿二日記す」

